

教 仏 名 聞

第25号
(発行日)

2012年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

業 に つ い て の 問 答

A 「業についてお話下さい。仏教で言う業とは」

D 「行いのことですが、単なる行為ではなくて、行った者の上に必ず行いの結果が残るような行いを業といいます。業には善業、悪業、無記業の三種があります。そして業によつてが報いが現れることを因果応報といいます」

A 「善業とは」

D 「善き行いのことですが、結果として行為者の上に安樂がもたらされるような行いです。たとえば、人に暴力をふるわない、他者のものを不当に取らないなど、相手を悩ませることのない行いです」

A 「悪業とは」

D 「悪い行いのことですが、結果として行為した者の上に苦しみをもたらされるような行いのことです。たとえば、暴力をふるったり、相手を侮辱して悩ませるなどの行いです」

A 「では無記業とは」

D 「苦でも楽でもない結果を

もたらすような行いのことですよ」

A 「無記業は具体的にどのような行いですか」

D 「たとえば歩く、ひげを剃る、コップを手に持つ、咳をするなどなどいくらでもあります。ですから善悪の業とそれによる苦樂の結果は、その人の行うあらゆる業因とその結果(業果)の一部分について言われるのです」

A 「ときどき(国家の業)とあるのは(親の因果が子に報い)などと聞きますが、それはどうなんですか」

D 「善悪の業とその報いは一人の行為者の上だけで言われるのであって、共同体や集団などではないと思いますし、また親がウソをついたからといって子どもがその報いを受けるようなことはないと思います」

A 「では例えば隣りの人が難病で苦しんでいるとします。それはその人の悪業の結果なのでしょいか」

D 「病苦の因縁はいくらもありま

す。その人の病いがその人の過去の悪業の結果かどうかというよう

なことは一義的に決められず、と

うてい分らないことですよ」

A 「受ける苦痛の因縁はいくらもあるのですか」

D 「ええ、自分の上に苦をもたらす因縁はいろいろあります。その中の一分に自分の悪なる行い(悪業)の結果もある

のであって、人における全ての苦の原因がその人の悪業から来るとい

うのではありませ

ん。寒さ暑さ、体の不調など、あるいは自然災害や戦

いなど苦難を受けるなど、さまざま

な外的縁から来る苦があります。たと

えば転んで足をケガして痛

かったとします。これが自分の過去の悪業の報いである

とは決められません。寒い時に外に出ると寒さが身に

しみて辛いですね。それは自分の悪業の結果と

D 「ええそうです。その人の現在の苦樂の結果とその人の過去の善悪の行いがどう結び付いているかを知ることができるのは仏陀とか阿羅漢(聖者)にしか分らないと言われている

と思います。いわんやお互に凡夫同士で、他者の苦をその人の悪業のせいだなどと決めつけるのはお

おがましいことであり、してはならないこと

ですよ」

A 「では仏教で業の教えが説かれた理由はなんですか」

D 「釈尊の当時は業の教えは悪を反省し善を行うことへと人を導き育

ていくための目的で説かれた

した。それが後世になるにしたがって、業理論は拡大解

釈されていきま

したが、業の教えの本来の目的を忘れてはなりません」

A 「業の教えは私たちがそれを聞いて、自分の行為を反省し、悪をつ

つしみて、善に向かうために説かれた

のですね」

D 「ええ、ですから因果応報の教えは、他者の不幸を批評したり、ある

いは人に起こる現象や世界に起こる現象を説明するための理論として説かれたのでは

A 「人の能力の有無、姿の醜、身体能力の違い、人の上に起こる出来事などをその人の過去の業とその報いで説明されるのを聞いたことがありますか」

D 「一人の上に現れるさまざまの事象は、無量無辺の因縁がからみあって展開しているのであって、因果応報はそういう展開の一部分に関することです。ですから人の姿形が美しいとか醜いとか語学の才能があるとか無いとか、あるいは貧困家庭に生まれたとかそうでないとか、さまざまの差異がどうしてあるのか、そんなことは凡夫の私たちに分かるはずがありません。それを説明するために、その人の過去の善悪の業の違いの結果だけで考えたり言ったりするのは間違いです」

A 「人それぞれにおけるさまざまな違いは無量無辺の因縁がからみあっての結果なのですね」

D 「ええ、この世の中の全ての事象や人の上の事象は無量の因縁がからみあってのことで、だから人それぞれの差異の理由を見つけようとしても結局はわかりません」

A 「現在自分に起こる苦しみ
の原因はすべて過去に自分の行った悪業の報いだと聞いたことがありますか」
D 「それは正確な話ではありません。前述しましたように、自分の上に苦しみを引き起こす因縁はいろいろあります。その中に自分の悪業の結果としての苦もあるものであって、自分にこうむる全ての苦が自分の過去の悪業から来るというのでは勿論ありません」
A 「自分が感受する苦楽の因縁はたくさんあるのですか」
D 「ええそうです。そしてその中で自分の行いの善悪によってもたらされる苦楽もあって、それが善因楽果、悪因苦果といわれ、悪をなせば必ず苦の結果を招来し、善をなせば必ず楽の結果を招来する、といわれるのです」
A 「それにしても、自分に起こる苦しみの原因は過去に自分の行った悪業の報い」と言われる場合があるのはなぜでしょうか」
D 「仏教の話は、自分自身の上にお聞かせをいただくものです。だから善因楽果・悪因苦果の教えは、教えを聞く本人自身が、自分の今までのあり方や生き方や行いを自己批判し、現在、悪をつつしみ善

に励むことを勧めるために説かれた教えです。ですからどういう意図で説かれている教えであるかは大事なことです」

A 「仏法は、一人ひとりが真実に目覚め、善く生きていくための教えなのですね。では他人ごととしてではなく、自己一身の上に、自分の現在の苦しみはこれは過去の罪の報いだ」と受けとるのはどうなのでしょう」

D 「自分が自分でそう受けとることによって自分の苦を引き受け、これからは悪をつつしみ善に励もうというのなら、それはいいです。あるいは自分が現在受けている苦しみを、自分の過去の罪の結果と感じて、自分の罪深さを知り、その自分にかけて下さる阿弥陀仏の慈悲を味わうというように、自分の信心を深めるものとして自業自得の話を聞かせていただくのは結構なことです」

A 「同じような問いですが、一切の自分の苦しみは自分の迷いから起こってくる」という説法を聞きますが、これはどうなのでしょう」
D 「それは何を言おうとされ

ているのかというと、自分に感じる苦しみの一切の本は無明あるいは執着心から起こるのだと言われているのです。これは大事な教えです」

A 「ということは現在の苦しみの因を単に自分の過去の業に見るというのではないのですか」
D 「ええそうです。むしろ一切の苦の本を、今もっている自分の迷い心から来るとの教えです。自分に起こる苦しみの原因を過去の自分の悪業にあると受けとるのはいいとしても、苦しみの根本原因は今自分の迷い心・執着心から来るとお聞かせいただく。そのように現在に起こる苦しみの原因は、過去の私のせいというより、現在の私の心の中にあるというのがむしろ仏教の説法を中心です」

A 「それはどういう意味ですか」
D 「一人の人生には、いろいろな苦しみの縁がつぎつぎとやってくる。病気にもなり事故にも遭い、災害にも遭い、経済的な損失にも会い、人間関係にも苦しみます。それはさまざまの因縁によって起こってきます。生きていくといろいろな難儀に遇うのはまぬ

ができませんし、避けて通れません。しかし、やってくる苦難に対して、それを悩んだり苦しんだり嘆いたりせしめている本に無明があり我愛の心があるのだと教えられているのです」

A 「自分に対する執着心（あるいは無明）が自分に起こってくる様々な苦しみの根本になっているのですか」
D 「ええそうです。そういう意味で、一切の自分の苦しみは自分の迷いから起こってくる」と言われているのです。そしてその無明が破られると、たとえ苦の縁が襲ってきてもそれらを軽く受けとり自分を見失うことがないと教えられています」

A 「釈尊が（我は第一の矢を受けても第二の矢は受けない）といわれたと聞いたことがありますか、そういうことですか」
D 「ええそうです。無明が破られていくと、たとえ外からいろいろな苦の縁（第一の矢）が来ても、それによって嘆きに悲しんだり、落ち込んでしまったり（第二の矢）するところがなく、つねに人生に光と希望をもって生きていけるとい

うことです」（了）

正信偈に学ぶ問答

(四十六)

三不三信誨慙

像末法滅同悲引

書き下し(三不三信の誨、慙にして、像末法滅、同じく悲引す)

現代語訳(道綽禪師は三不信と三信の教えを懇切に示し、正法・像法・末法・法滅、いつの時代においても、本願念仏の法は変わらず人々を救い続けることを明される)

(語釈)三不信——三信でない心のこと。それは淳朴でない心、一心でない心、相続しない心のこと。三信——三不信の反対で、淳心、一心、相続心のこと。

*

N「道綽禪師は〈三信と三不信の教えを懇切に示し〉とはどういう意味ですか」

D「お念仏を称えていても、満足できないのは弥陀の本願を信じていないからですが、その状態を道綽禪師は曇鸞大師の説かれた三不信の思し召

しによってさらに詳しくお説き下さったのです」

N「曇鸞大師の説かれた三不信とは」

D「大師の『浄土論註』に

〈三種の不相応あり。一には信心淳からず、存ずるがごとく亡ずるがごとくゆえなり。二には信心一ならず、決定なきがゆえなり。三には信心相続せず、余念間つるがゆえなり〉

とあります」

N「難しいですね。やさしく教えてください。まず三信とは」

D「三信とは淳心、一心、相続心のことです。真実の信心はこのような三信(三心)の性質がかならずそなわっている」と仰せられるのです。逆に本願を信じる信心が真実の信心でない場合は、信心が淳からず、一ではなく、しかも信心が相続しないのです。それを三不信と示されたのです」

N「〈信心が淳からず〉とは、

どういう状態ですか」

D「〈信心が淳からず〉は〈存ずるがごとく亡ずるがごとくゆえなり〉と仰せ下さるうちに、ある時は阿弥陀様のお慈悲を感じて信心があるように思っている、しばらくすると空虚でさっぱり阿弥陀仏の慈悲が感じられなくなる、というように信心があつたりなかつたり、信心が出来たり壊れたりするようなのは、真実の信心が未だ私に成就していないためです。それは本願にたいする淳心ではないからだと仰せられるのです」

N「ある先生のお話に感動して、うれし涙であふれたりすると、ああこれで信心がいただけだと思う。しかしやがて、阿弥陀仏の〈そのままなりを助ける〉とのお言葉を聞いても感動もなく、心の中は虚しくなる、というような状態になる、そういうことが今まで何度もありましたが、これはどうなのでしょう」

D「そういうのを〈存ずるがごとく亡ずるがごとく〉とここで仰せられるのです。阿弥陀仏の大悲のお心がまだいただけではないからです」

N「ある時、ああ有難いと一度は感激しても、それがその

場かぎりの感激であつて、あとは虚しくなつて続かないですね」

D「そういうのが信心が相続しない姿といわれるのです」

N「ある時に感じた仏法への感激がなくなつてしまつて、歎異抄第九章を持ち出して、

〈他力の悲願はかくのごとき自分の心にいきかせていま

D「それは〈なでつけ安心〉といつて、教えの言葉を自分にいきかせて、無理に落ちつこうするのです。がやはりそれは真実の信心ではないのです。だから海の上の波が上下するように、喜んでみたり、虚しくなつてみたり、繰り返しが続くのです」

N「なぜ阿弥陀仏の大悲心を聞いても、聞いた仏法が〈存ずるがごとく亡ずるがごとく〉浮動するのでしょうか」

D「それは弥陀の大悲心がいまだ自分に〈真心徹到〉していないからだと思います」

N「真心徹到とはどういうことですか」

D「真心徹到の徹到について宗祖は〈髓にいたり徹る〉とおっしゃつています。すなわち私の心の中、枢に如来の大

悲心が届くことです。それが真実信心をいただいたといわれるのです」

N「そうなる」と信心があつたりなかつたりということにはならなくなるのですね」

D「ええそうです。そういう信心のすがたをここでは淳心といひます」

N「淳心の言葉の意味は」

D「淳とは、広辞苑に〈すなおでかざりけのないこと。まじりけのないこと〉とあります。弥陀の本願を素直に受けとり、自分の考えをまじえていないのが淳心としての信心です」

N「そうすると本願を信じるのは淳信ですから、弥陀の本願をごく素直に受けとつていることなのですね」

D「ええ実際そうです。理屈も何もない、阿弥陀仏の仰せのまま受けとつて外に信心はないのです。阿弥陀仏が〈助ける〉と仰せ下さるので、すから、〈助ける〉とその通りに受けとつてほかにありません」

N「阿弥陀様の本願の仰せを、ごくすなおに単純に受けとつている心、それが淳信なのですね」

D「ええそうです」(了)

木村無相さんの法信5

(昭和五十七年) 六月十一日 (金)

朝七時半

武生駅前の林病院の待合室にて。

無相

さて昨日はドコまで書いたことか、しかし今日は今日で思いついたこと書くことにします。

*

「三定死」ということは、考えようによつてはわれわれ凡愚は、久遠劫来、「三定死」なんです、コト出離に関しては、全く無力で、出離については、いつもどうしようもない自分であるが、それに気がつかないで久遠劫来、迷いに迷うて来たというてもよいと思うことです。それに気がつかなく、ただで、今生で縁あうようになって、五年、十年、聞いているうち、知らぬ間に「三定死」らしいと気づかされたので、今さらの「三定死」ではないのです。

「三定死」は文字通り「三定死」で、助かる道はなく、凡夫としては、未来永遠に出離の手がかりは無いのですが、それを見ぬかれた法蔵菩薩さまが十劫の昔に「念仏往生の道」を建ててくださったので、そのオカゲで、私にいわすと、「唯念佛」という白道をひらいて下さったのです。それで、自分としては、ただ一つの道があれば「三定死」ではないワケですが、凡夫個人としては、まったくの「三定死」

で、どうしようもないまま、助かる道は無いのです。

がソコで、如来法蔵様が「念仏往生」ただ念佛という「白道」をおあたえ下さって、どうして助からぬ身に、お助けの道をつけて下さって、「ただ念佛するよりホカには道はないぞよ、凡夫は自分がドソナ人間であろうが、そのまま称えよ、そのまま白道にふみこめよ」と、言いづめに下さっているのですが、「三定死」の凡夫はナカナカそれが信じられない。

それで自己流に「若存若亡」を十年二十年、三十年とくりかえしつつ、そのままで、人生にわがムネに、光が見出せぬまままほとんどの人が死んでしまうのですねえ。

紀さんの手紙に

此の道(白道)は余りにも狭く余りにも単純で、何か本当に往けるのだろうか、助かるのだろうか、ひよっとしたら一生かかっても駄目ではなからうかとの疑念が湧いてまいります。

又自分の様なダメな人間では往けるだろうかと思ったりします。

と正直に書いているが、「自分の様なダメ人間」のために特に五劫思惟、永劫修行されての「念仏往生」「ただ念佛」の白道ゆえ、全くのダメ人間が渡らなくては渡る人がないのです。

ダメ人間のために特に「念仏往生の本願をたてられ、ただ念佛の白道を、だれでも、渡れるように、白道して下さっているの、ダメでない人間のための白道ではないー。

たとえば串木野からコシキ島まで泳いでゆけない、歩いてはゆけない人のために「串木野ーコシキ島」間の渡し船があるの、泳げない人、海の上歩けない人間が「私のような泳げない人間はこの渡し船に乗る資格はない」などと言ったらサゾおかしなことでしょう。

どうして歩いてゆけない人のための渡し船であり、列車であり、バスであるのに、「私は歩けない、泳げないから、乗ったらいけないだろう」と思うのはコツケイな話で、そういう人のための渡し船であり、白道「念仏往生の道」なのだから、そういうワレワレが乗せてもらわねば、「乗り手」が一人もないことになって、船主(如来)の方はこまってしまうことでしょう。

紀さんは

自分の様なダメな人間では往けるだろうかと思ったりします。

と言っているが、往くこと、海上を歩くこと、泳ぐことの出来ないダメ人間のための「串木野ーコシキ島間」の渡し船ですから、そういう人こそ、ダメ人間こそ、「ありがとう、ありがとう」と乗せてもらい、乗せていってもらえばよいので、それも渡し船に乗るのにお金やお礼は一銭もいらないので、マルキリ、タダの船なので、ただおおせのままに乗せていただければ、自分で往け、歩けというのはなく、船が自然と渡してくれるので

あるから、自分のようなダメな人間がはたして「往けるだろうか」の心配はいらないのであります。

まだ「三定死」という自覚までいっていないというのは

自分の様なダメ人間で本当に往けるのだろうか。

と思つているところがまだ「三定死」になつていない。まだ「三定死」の自覚さえもないのであります。

「三定死」であろうがなからうが、ダメ人間とホントーに思つたら文句なく、白道にふみこめばいい、渡し船に乗ればいいので、それも自分で「ふみこむこと」「乗りこむこと」もいらないのですねえ。「ふみ込む力」も「乗りこむ力」もない、まったくの「ダメ人間」なので早やすでに「お念佛」を下されていて、今さらふみこむことも、乗りこむこともいらないようにして下さっているのですねえ。それこそ底無しのダメ人間なので。

ご和讃に

弥陀観音大勢至

大願の船に乗じてぞ

生死の海に浮かびつつ

乗せて必ず渡しける

と「乗せて」とまでおさとし下さっているではありませんか。

自分から乗つたり往こうとしたりすることまで出来ぬ、マルキリの「ダメ人間」であるから、「そのまま」という仰せがあるのではありません。「ダメ人間」の「ダメなソノママ」ということでしょう。

(続く)